



# 1,800 人の生徒を 「避難者」から「救助者」に ～地域の方と住み分ける、校内避難所運営にむけて～



神奈川県 川崎市立川崎高等学校  
福祉科主任 小林 和紀

## 1 防災拠点として運営するには

川崎市立川崎高等学校は附属中学校と定時制と療育センターを併設し、教職員含め約1,800人が学ぶ教育施設である。本校は川崎市の地域防災拠点に指定され、例えば津波が来たとしても、校舎の3階以上であれば水害から免れる設計となっている（写真下）。ただ、水位が上がる前に1階地域住民用の備蓄倉庫の物資を生徒たちで上層階に運ばなければならない。この時、避難指定の大島連合町内会の方々が、避難してくることが想定される。しかし、この場合の住民と在校生の居住空間に関するルール作りが未だ策定されていない。

昨今の自然災害を見るにつけ、地域住民との避難訓練に加えて、物資の運搬、避難教室の区割り、正しい情報に基づく連絡体制の確立などを検討していく場が必要となった。又、生徒においては、皆が「被災者」でなく「立派な救助者」になっていく意識付けと訓練が重要課題になる。



地域防災拠点に指定された教育施設（本校）

## 2 高校生復興ボランティアバスの実施

東日本大震災直後、釜石市にいる新聞記者

から連絡があり、「子どもたちは皆無事。本が足りない。本を持ってきてくれ。」と連絡があり、持てるだけの本を、小中学校と釜石高校に届けた。体育館で余震と寒さとのなかで、不安を耐え忍ぶ住民たちの中から、進んでトイレ掃除、灯油の補充、小学生の面倒を見る高校生の姿に感銘を受けた。又、笑い声が響き、皆を笑顔にする赤ちゃんの笑う声に、計り知れない生命力を知った。

この経験から、一人でも多くの高校生を現地向かわせ、相手を想い、真心から行動する美しさを体感させたいと、「川崎市春休み高校生復興隊ボランティアバス」を実施した。その多くが本校生徒で、後に貴重な体験談を全生徒に伝えた。



釜石市鶴住居幼稚園の清掃



川崎高校生徒会 気仙沼ボランティア活動

その後、教員たちで何度も訪れ、気仙沼市を支援拠点として毎夏、生徒会リーダー研修会を行っている。又、災害救助の後方支援であった花巻温泉の支配人から、災害ボランティアの仕組みと準備の大切さを学んだ。

### 3 防災宿泊研修会の実施

学校滞在時に被災し帰宅困難に見舞われたと想定し、福祉科1年生を対象に「防災宿泊研修」を計画した。福祉科の生徒は将来、介護福祉士として福祉、介護、医療分野等の道に進む上で、助け合いや社会貢献など「共助」の精神を育み、人間としての在り方を考える機会とした。

具体的には、新聞紙を布団代わりとし、簡易トイレとローソクの作成、冷水でカレーを作り食べた。カードゲーム「クロスロード」を使い、臨機応変な考え方を磨いた。救急救命専門の医師と看護師を招聘し、緊迫した状況下で心肺蘇生法演習を行った。これには町内会の住民も参加した。



防災宿泊での冷たいカレーの試食

### 4 避難所開設訓練の合同実施

毎秋、大島連合町内会で川崎高校と近隣小学校を会場として、「避難所開設訓練」を行っている。九都県市合同防災訓練では、本校生徒が中心となり「災害ボランティアセンター設置運営訓練」を企画し、町内会住民の多くが参加した。

### 5 津波避難訓練での実証実験に協力

川崎市におけるICTを活用した津波被害軽減に向けた研究（東北大学・東京大学・富士通・川崎市）として町内会内でスマートフォンアプリを活用して「通れる避難路」を検索・情報共有し、被害軽減と防災啓発につなげる実証実験に、本校中学・高校生が参加し全校の防災意識の向上につなげている。

### 6 合同避難訓練の時間短縮

本校では、年一回、高校、中学、定時制（昼・夜）、療育センター合同の避難訓練を行っている。これまでの取組により、生徒一人ひとりの意識が徐々に向上し、避難完了時間が短縮している。平成28年は10分10秒、平成29年は9分30秒、平成30年は8分17秒と効果が確実に表れている。

### 7 埋もれているニーズを拾い上げ、その解決を通じ、生徒の潜在能力を引き出す

隣接する商店街には、クリスマスコンサートをはじめ合同清掃活動が定着している。福祉科の卒業生は介護福祉士、看護師として、地域の高齢者障害者施設、病院等に勤務している。

今後は、女性、ペット受け入れ、外国籍住民・観光客や、様々な障害をもつ人も対応する避難所対策が求められる。これには、住民の小さな意見まで聞き入れた上での決断が求められる。そして丁寧な周知徹底をしてから、防災について包括的な準備を早急に行政とともに動き出さなければならない。また、年2回の「学校教育推進会議」を活用し、方向性を示していきたい。